

いわて防災学教室

災害から学び、災害に備える



冬の避難路に要注意！

岩手大学地域防災研究センター特任教授

柳川 竜一

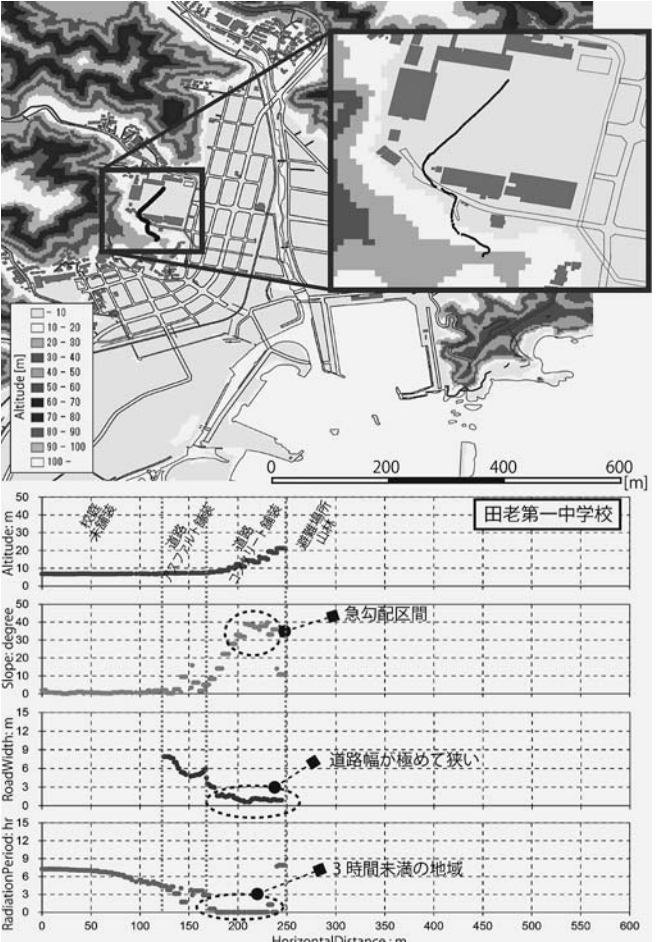
東日本大震災の教訓として、「津波から命を守るためには迅速かつ安全な避難行動が重要である」ことは、皆が再認識したと思われる。では、「安全な避難」を行うにあたり注意すべき点として、これからの時期何が挙げられるだろう？岩手県沿岸部では、2月～3月にかけて大雪に見舞われることがある。近年では、平成26年2月中旬沿岸全域に出された大雪警報とそれに伴う短期間での積雪（久慈70cm、宮古43cm、大船渡15cm、いずれも気象庁観測の最大積雪深）を記憶されている方も多いかもしれない。また、残雪期に北日本を襲った大津波は、昭和三陸地震（1933年3月3日）、十勝沖地震（1952年3月4日）、そして東日本大震災（2011年3月11日）が挙げられ、当時は高台への避難中に足を滑らせたり転倒による怪我や逃げ遅れが出たことも想像できる。そこで、今回は津波避難路の雪に対する危険性について考えてみたい。

岩手の沿岸地域は、狭い湾が複雑に入り組んだ沈水海岸が多く平地が少ないため、急峻な斜面地形やその山麓に沿って集落が配置されていることが多い。やっかいなことに、この様な集落では冬期になると夏期と比較して急激に日射量（日照時間）が減少するため、いったん降った雪は太陽光による融雪効果がなかなか見込めない。筆者はそのことに注目し、津波避難路の舗装状況や勾配、道路幅員、日照時間の長さ等の分析を進めている。その一例として、田老第一中学校が設定している津波避難路を紹介しよう。

学校指定の避難路は、校庭南側の斜面に沿って手すり付き簡易コンクリート舗装道路が整備されており、標高20mの高台が第一次避難所となる。距離は校庭の端部から130m程度と短いのだが、コンクリート舗装道路の最小幅は0.8m程度と、子供2人がすれ違うギリギリの幅で追い越しをするのも難しく渋滞が発生しやすい。また、冬期日照時間は極めて短く、最大約40％の急勾配は避難行動中に誰かが転倒すると連鎖的な転倒に発展する可能性も十分に考えられる。このように、現在の避難路は急勾配・幅員の狭

さに加え降雪期の融雪が期待できないことを考慮して、避難路の拡幅や階段への改変、複数路の避難路設置が有効であると考えている。

先日、田老第一中学校の校長先生と話をする機会があった。津波避難行動中に潜む危険についても話題が及んだが、地域の方々の協力もあり校舎北側斜面に車両が通れるほどの幅員を有する避難路設置が実現しそうだとのこと。あなたの近くにある避難路はいつでも安全に避難が行えますか？時間帯・季節・天候の変化にも対応可能か気を配る必要があるかもしれない。



学校指定津波避難路の特徴（標高、勾配、幅員、日照時間）